

展覧会によせて 一石に思いを刻む

京都国立近代美術館長
柳原 正樹

この作家は、いつ頃から石に思いを刻むようになったのであろうか。重く、堅く、冷たい石に鑿を入れていく。苦しみとも思える制作は人間としての証を刻むためなのだろうか。黙々と石に向かうその行為は祈りを捧げる姿にも似ている。だが、その作品に苦悩の痕跡はない。優しさと温かさに満ちあふれている。

絹谷幸太は、石を刻み続ける彫刻家である。それは、単純にして明解、ユーモラスな要素さえ備え持つ存在感のある抽象彫刻だ。しかし、この作家は、造形の力強さや形態の構築性といった従来の彫刻を追い求めているわけではないような気がしてならないのである。

円みを帯びた形態、どこか植物のような、柔らかな感覚を持つ作品は、神や自然への畏敬の念を形として残したいがための制作なのかも知れない。だからであろうか、タイトルもまた《愛》、《夢》、《未来》と祈りにも似た思いが込められており、その思想が表情となり形となって出現する。つまり、制作の根底には、常に愛と平和と祈りが内在しており、それが原動力となり制作へと向かわせるのであろう。

さて、このたびの展覧会は、モニュメンタルな大作ではなく、小品を中心に、十数点の作品が発表される。その愛すべき作品群は、まるで宇宙からの贈り物のように、深遠な輝きを放っている。石そのものがもつ美しさと、それを損なわないようにして与えられた形。石という塊から彫り出された形態は、どこまでも違和感なく自然なのだ。まさに石に命としての形を与えるのが彫刻家の使命であるように。

かつて、新妻実という彫刻家があった。石彫家として、ニューヨークを拠点に活躍した日本を代表するひとりであった。生前、新妻は自身の作品について「石という素材に全て手を加えるのではなく、一部を残して作品とする」と語っていた。つまり細部まで磨き上げられた部分と、自然のままの荒々しい痕を残す。人間の手わざと素材の力が融合した作品ということである。絹谷幸太もまた、新妻に師事したひとりだ。その出会いは、1993年11月、ニューヨークのアトリエであった。その折、新妻からジョージ・シーガルやマリソールを紹介されている。その後、助手を務めたり、新妻と同じ展覧会に出品するなど、師の彫刻に対する深い想いを直に学んでいる。この教えは、このたび出品された作品の随所に伺うことができ、億年単位の地球の歴史とともにある石への畏敬と愛の深さが強く伝わってくる。

また、空間に対する感覚の鋭さにも特筆すべきものがある。彫刻あるいは立体に携わるものは、常に空間を意識することが必要なのだ。三次元に位置する彫刻の神髄は、作品が置かれた空間に緊張を与え、その空間をゆさぶり、命として空間にどのように存在するかが問題となるからである。絹谷のそのひとつひとつの小品たちも空間感覚は洗練され、雄大なスケールをもつ独自の宇宙観を創出している。

このたびの展覧会は、絹谷幸太という彫刻家のこれまでの作品の軌跡をコンパクトにまとめ上げたものであるとともに、次なる制作の方向性さえも示唆している。